第2回 金沢学生まちなか回帰検討会議

報告事項「ワークショップ」

補足資料

2026年11月　／　株式会社ガクトラボ

DESIGN

テーマと対象の選び方

WORKSHOP 01

まちなかに住んでみたいと思ったことがある金沢近辺の学生

「〇〇があれば、金沢のまちなかに住みたい」を話し合おう！

選定の理由

市の調査から、まちなか居住への関心層が想定以上に存在することが分かりました。関心の有無を数で測るのではなく、「どんな形なら住めるか」を具体的に聞くため、関心層に絞って実施しました。

WORKSHOP 02

石川県内の大学等を卒業後、県外に転出した方 /県外に転出したのち金沢に戻った方（20代〜30代）

「学生時代の金沢と、金沢から出てから見えたこと」を話し合おう！

選定の理由

在学中は比較する対象を持たないため、金沢の価値も課題も見えにくい面があります。外の地域を知り、社会人になり、学生時代を振り返ることで初めて言語化できる視点を得るため、この対象を選びました。

SUMMARY

2回のワークショップを通して見えたこと

1. **「まちなか居住」はハードルが多くあるが、形次第で成立する**
   4年間の定住という形だけで設計すると選べる人が限られる。週末・短期・カップル・2拠点・研究連動など工夫が必要
2. **引き留めるより、送り出して「卒業後の関わり」を継続する**
   流出の最大要因はキャリア。戻ってきてもらう、関係人口になってもらう設計のほうが現実的
3. **金沢の食や文化の価値は、出てから・稼いでからの方が伝わっている**
   在学中は享受するお金などの余裕がないことで、魅力を感じる機会を逃している
4. **日常的にまちなかへ行く理由がない**
   イベントでの来訪は成立しているが、内容や対象層には偏りもある。足りないのは授業・食事・作業など日常の来訪
5. **まちなかに、安心して趣味や地域と繋がる居場所が足りない**
   観光客向けの混雑や夜の街のノリから距離を置く層もいる。長居でき、地域と穏やかに繋がれる場所が求められている
6. **制度や場所だけでなく、「つなぐ役割」を担う人が必要**
   制度や場所だけでは、自ら動く層にしか届かない。つなぐ役割を担う人が要素として必要

VOICES

象徴的な声

「中心市街地活性化を研究テーマにしているのに、自分は郊外に住んでいる矛盾を感じていた」

住む動機は利便性でも費用でもなかった。友人の誘いで、研究テーマからまちなかに住むことを決めた　第2回・卒業生

「若者に住み続けて欲しいというオフェンス的な方よりは、…今いる人を守るディフェンス型の方がいい」

出ていこうとする人を引き留めたりするのではなく、第1回で在学生が挙げた不満の多くを解決する方向がよい　第2回・卒業生

「学生と地域や活動をつなぐキーパーソンが100人くらい作れれば、みんな友達を誘って学生団体に入るのも選択肢になる」

制度や場所ではなく、人のつながりが実際の入口になっている　第2回・卒業生

「またあったら呼んでほしい」「金沢好きだから関わりたい」

卒業生が、意見を聞かれる側ではなく、企画に関わる側として参加する意思を示している　第2回・卒業生

「学生を来させるだけでは解決にならない。既にイベントで学生はまちなかに来ている」

足りないのは来訪ではなく、日常的にまちなかにいる理由や、より濃い関わりを持つこと　第1回・学生

「歩ける範囲でお気に入りのお店があるところに住みたい」

学生街の景色に魅力を感じないという声もあり、徒歩圏に「らしさ」がある魅力的な景色や店などがあるかどうか　第1回・学生

「図書館もサイゼもコメダも、テスト期間は人でいっぱいになる」

いま金沢にいる学生が、日常的に困っていることは学習スペース　第1回・学生

PROPOSALS ／ 両回の記録に具体的な発言があるもの

特に注目すべき6つ

1	**移動と食のコストを下げる** バス・シェアサイクルの定額化／まちじゅう学食	在学中・日常
2	**週末・長期休暇に使える滞在拠点** 仮称：まちなか青少年の家。期間を限定した関わりを可能にする	在学中・週末
3	**テーマ型のシェアハウス** 家具家電付き・初期費用なし。住む動機を持つ学生が集まれる形	住む
4	**卒業生向けの金沢滞在支援** 宿泊・施設利用の優遇。出ていった人との関係を保つ	卒業後
5	**大学における学びの仕組みをまちなかへ** 教養科目やまちなかに関連があるものなど。行く理由を、学業そのものにする	在学中・学び
6	**学生とまちをつなぐハブ人材** 人を介して、自ら動かない層にも届ける	横断

方向性への示唆

1 移動と食のコストを下げる

学生向けの路線バス等の定額乗り放題、まちなか周遊限定の無料シェアサイクル。まちなかの飲食店に学生が気軽に訪れることができるような仕組み。第2回ではタリン市の交通無料化、スロベニアの「ボニ」方式（200店以上で半額程度）が示された。

2 週末・長期休暇に使える滞在拠点（仮称：まちなか青少年の家）

低料金で宿泊でき、荷物を預けられる拠点。第1回では「週末だけ安く泊まれ、荷物ロッカーを備えた拠点」、第2回では「飲んだ後に泊まれる簡易宿泊機能」「卒業生の3年限定お試し滞在」が挙がりました。既存施設の転用も視野に。

3 テーマ型の家具家電付きリノベーションシェアハウス

初期費用と契約期間のハードルを下げた共同居住。第2回には、研究テーマとの矛盾を感じ、友人の誘いで南町・天神町の一軒家を4人で月3〜4万円で借りていた例があります。そういった学生や民間の取組に支援・補助する選択も。

方向性への示唆

4 卒業生向けの金沢滞在支援

卒業生向け宿泊支援、2拠点目の滞在支援、文化施設の入場優遇、アルムナイ（同窓）ネットワーク。第2回では島根県海士町の例として、元住民への交通費の住民価格適用、格安のシェアハウス提供、イベント運営に関われる設計までが紹介されました。第2回の参加者自身からも、企画に関わりたいという声が多数ありました。

5 教養科目など、大学における学びの仕組みをまちなかに再設置

大学の講義の一部を、まちなかの施設でサテライト開講する。全面移転ではなく1科目・1コマからでも。地域連携系の科目、社会人聴講を含む科目、ゼミ・演習など、まちなかで行う意味がある内容から始める。

6 学生とまちをつなぐハブ人材の育成・配置

学生と地域・事業者をつなぐ役割を担う人の育成と配置。学生自身が担う形も含みます。第2回では「キーパーソンが100人くらい作れれば」という規模感が示され、第1回でもシェアハウスに入ったきっかけは友人の誘いでした。

そのほか、参加者から出た意見

居場所・活動の場

テスト期間中の公共施設の一部を、学習スペースとして臨時開放	WS01
眺望のある公共空間の開放	WS01
美大生等が作品発表・滞在制作を行えるまちなか拠点	WS02
夜の街のノリが苦手な層も、背伸びせず居られる場所	WS02

つながり・関係人口

新入生・県外出身者の「まちなかアンバサダー」化	WS02
観光地の繁忙期における、住み込み短期アルバイトの提供	WS02
学園祭等をまちなかで開催し、地元飲食店・キッチンカーが出店	WS02
季節イベント連動の店舗周遊スタンプラリー	WS02

食・文化

文化施設の学生証提示による無料化・優遇	WS02
学生の深夜アルバイトを可能にし、飲食店の営業時間延長につなげる	WS01

PENDING ／ 本資料で具体策を示せなかった論点

追加で議論を要すること

働く場の選択肢

第2回

流出の最大要因は、住環境ではなく仕事です。第2回では「やりたい仕事に繋がる経験をするには、金沢の外に行くのが自然だった」と語られました。フルリモート可能な企業に特化した就職説明会、金沢に拠点を置くスタートアップとの接点づくり、欧州エラスムス制度を参考にした短期交換留学といった案が出ました。このボトルネックに対して、大学・企業との連携を前提に、別途の検討の場が必要になると考えられます。

在学中の居住と、卒業後の定着のつながり

第1回

第1回では「学生カップル→夫婦という理由で市内定着するのが理想では」という声があり、カップルで住める住まいの確保が挙がりました。在学中の居住が卒業後の定着につながる経路として語られた、記録のなかで唯一の例です。ただし第2回の記録に該当する発言はなく、どのように扱うのが良いか議論が必要です。